

鈴木胤『論語参解』私注 (三十五)

田尻 祐一郎

二十五

子貢問曰、

コ、二人アリソノ

郷人皆好^{セハ}

愛シテ中ヨクスル也

之^ヲ、何如、子曰、未可^{ナラ}也、

郷愿カ、⁽¹⁾巧ニ人ヲアザムク佞人カ、⁽²⁾又ハ善柔懦弱ノ人カ、此タ

グヒノ人ナランモハカラレヌ故ナリ

郷人皆悪^{マハ}

キラヒニクム也

之^レ、何如、子曰、未可^{ナラ}也

高慢者カ、我マ、者カ、偏氣者カ知ラレヌ云ブン故ニ、未可也
不如^レ郷人之善者好^{ハシ}之^ヲ、其不善^{ナル}者悪^{マン}之^ニ

此人ハ決シテ善キ人也○惣シテ一郷ト云位ノ所ニ、スグレテヨ
キ人ハ罕ナル者ニテ、大カタ凡庸ノ衆人ナレバ、其一統ノ好悪
評論ハアテニナリガタシ、サレバ後篇ニモ、衆好之必察焉、衆
悪之必察焉トアルナリ⁽⁴⁾

(1) 「子曰、郷原徳之賊也」(陽貨篇第十三章)

(2) 「顔淵問為邦、子曰、……放鄭声、遠佞人、鄭声淫、佞人殆」
(衛靈公篇第十章)

(3) 「子曰、衆悪之必察焉、衆好之必察焉」(衛靈公篇第二十七

章

(4) 仁齋『論語古義』は、『論語大全』から輔広語「郷人皆好、恐是同流合汚之人、郷人皆惡、恐是詭世戾俗之人、故皆以為未可、惟郷人之善者、以其同乎己而好之、則有可好之實矣、不善者以其異乎己而惡之、則無苟容之行矣、方可必其人之賢也」を引いて、「可好之實」があり「苟容之行」、人に氣に入られるための行動のない者が賢者だと論じている。胤は、こういう議論の方向に違和感を懐いている。大峰にも、「但此章論郷人之臧否耳、当非以此可否君子」という発言がある（『論語群疑考』）。

二十六

子曰、君子易事

ツカハレ易キ也

而難説

誠ニ其心ニ入りテ、善キ者ト思ハル、事ハ難シトナリ

也、説之不以道不説也、

道ニ叶フ事ハタヤスカラヌモノ也、是説シメガタキ故ナリ

及

其段ニナリテハ也

其使人也器之

器ヲ使フ如ク、トリヘトリヘヲ以テ用テ、其不得手ナル所ヲシ

ヒヌナリ

小人難事而易説也、説之雖不以道

タ、其心ニ入ベキ事ヲダニ持カクレハ

説也、及其使人也求備焉

全備ヲ求メテ勘弁ナキ也、小人ノ常情ナリ (1)(2)

(1) 朱子は、「君子之心公而恕、小人之心私而刻、天理人欲之間、每相反而已矣」(『論語集註』)とした。徂徠『論語微』はこの章に言及しないが、春台は、「宋儒常言天理人欲公私義利而已、所謂私而刻者、朱熹自謂也」(『論語古訓外伝』)と皮肉っている。

仁齋は、「君子持己之道甚嚴、而待人之心甚恕、小人治己之方甚寬、而責人之意甚刻、君子説人之順理、小人説人之順己、君子貴重人材、隨才器而使之、而天下無不可用之人、小人輕視人才、故求全備、而卒至無可用之人」という『論語大全』の輔広語をそのまま引いた。これを批判するのが大峰で、「仁齋所引輔広之説、亦非也、甚嚴、何君子之行也、君子温恭以持己耳、甚寬、何小人之方也、寬是聖人之美德、是大誤寬字、又且以道為理、謂君子悅順理者、宋儒之學、仁齋善其説者、未免於旧染也」(『論語群疑考』)と論じている。

(2) 春台は「此君子小人、皆以德而俱言其使人、則皆在上位者也」(『論語古訓外伝』)とし、大峰は端的に「君子小人、皆以人君言之」(『家註論語』)とする。

二十七

子曰、君子泰

泰ハ大也、ユタカトヨム、寛トイヒ、弘トイヒ、簡トイヒ、愷

悌トイヒ、蕩々ト云、皆同意ナリ、仁ヲ体トシテ楽_レ天知命ニヨ

レリ⁽¹⁾

而不驕_ラ

恭儉ニシテ礼ヲ好ミ、鰥寡ヲモ侮ラザルナリ

小人驕_テ

位ニ高ブリ勢ニ誇リ、下ヲ侮リシヘタゲテ、法外ニホシイマ、

ナルヲ云

而不泰_{ナラ}

述而ノ篇ニ、長ニ戚々トアル是也、仁ニシテ寛大ノ度量ナキ

也⁽³⁾○驕泰共ニ心ヒロク高ク寛クワツナル事故ニ、大学ニハ二字

ツツケテ、共ニ悪キ事トセリ、此ニテハ君子小人ノ徳ニワカチ

属セリ⁽⁴⁾

(1) 「楽天知命、故不憂」(『易』繫辞上傳)

(2) 「君子坦蕩蕩、小人長戚戚」(述而篇第三十章)

(3) 朱子は「君子循理、故安舒而不矜肆、小人逞欲、故反是」

(『論語集註』)として、前章に続いて、「天理」「人欲」の枠組み

をそのまま「君子」「小人」に重ねた。崎門では、「君子ハ理ナリ

自然ニキレメナイユヘ、心ニ氣ツカイナコトモ、セマルコトモナ

ンニモナイ」「天下ニ人欲ホト氣ツカイナコトモナシ、……ソレ

ヲトケタサニ、苦ニナラヌコトモ苦ニナルヤウニナルソ」と説明

している(綱齋『論語師説』)。仁齋は、「君子守己儉而不以能

先人、故泰而不驕、小人恃其有而不以約儉己、故驕而不泰」(『論

語古義』)として、つづまやかにあるのが「君子」、浪費に流れる

のが「小人」として捉えた。仁齋の理解を、徂徠は「驕与奢

侈不同義、仁齋以儉解不驕、以不以約儉己解驕、未免倭訓読字」

(『論語微』)と批判した。

(4) 「君子有大道、必忠信以得之、驕泰以失之」(『大学』、『大学

章句』の分章で伝十章)。これについて春台が、「此章泰之与驕、

正相反対、若大学云、必忠信以得之、驕泰以失之、則驕泰与忠

信相反、而泰亦為驕属矣、亦猶周而不比之周、与比周之周、善惡

不同也、字義之無定廻爾」(『論語古訓外伝』)と指摘している。

「周而不比」は為政篇第十四章。熟語としての「比周」は、偏り

偏すること。

二十八

子曰、剛

心コハク烈シキ也

毅

ツヨク気丈ナル也

木

削リチリバメズ塗ザルアラ木ニ譬ヘテ、取ツクロヒ飾リノナキ
タチヲ云

訥

口重ニ不弁ナル也

近仁

徂来先生オモハレケラク、剛毅ノ人ハ、多クハ木訥ナルモノ也、
サルタチノ人ハ、必仁ニ近キ道理アリ中庸ニ云ク、力行近乎
仁、剛毅木訥ノ人ハ、必ヨク力行スル故也⁽¹⁾、腹云仁齋春台共
ニ、首篇ノ巧言令色ニ仁ナル事鮮キヲ引テ、事ハウラハラニテ、
意ハ互ニ相證セラル、由ライハレタリ⁽²⁾

(1) 古注（王肅）が「剛、無欲、毅、果敢、木、質樸、訥、遲鈍、
有斯四者、近於仁」とし、朱子『論語集註』や仁齋『論語古義』
もこれに倣ったが、徂徠は、「剛毅木訥、蓋古之成言、剛毅之人、
多是質樸而拙於言、故曰剛毅木訥、猶如巧言必帶令色言之、而
所重在巧言耳、近仁者、言其易成仁也、……好學近於知、力行
近於仁、知恥近於勇、蓋仁在力行、剛毅木訥之人、必能力行、故
云爾」（『論語微』）と述べた。「好學近於知、力行近於仁、知恥
近於勇」は、『中庸』（『中庸章句』）の分章で第二十章。徂徠は

「剛毅木訥」を、「剛毅」に比重を置いた古の慣用句と見て、さら
に「後儒析以為四、而謂剛以何故近仁、毅以何故近仁、木与訥各
以何故者、皆不識古言爾」と論じた。南冥・大峯・履軒・一堂・
息軒らがそろって徂徠に共感している。ここでは息軒を引いてお
く。「剛毅木訥、与巧言令色相反、剛毅者必不令色、木訥者
不能巧言、……不必每字积其近仁」（『論語集説』）。

(2) 仁齋は、「蓋巧言令色、外似而内実偽、剛毅木訥、外野而内
可取、聖人所以弁仁不仁者、於是可見矣」（『論語古義』）とし、
春台も、「此章与首篇巧言令色章、正相表裏、以二章觀之、可以
知仁矣」（『論語古訓外伝』）とした。なお仁齋は『論語大全』か
ら、胡氏（炳文）語「四者、天資之近仁者也、加之以学、則
不止於近矣」を引いたが、一齋にも同じような関心があり、胡氏
語を受けて「質剛毅者、加之以学、則剛毅中和順氣象温然、木訥
者、加之以学、則威儀文辞粲然、仁体於是全矣」（『論語欄外書』）
と述べている。朱子『論語集註』は、「四者、質之近乎仁者也」
という程氏（頤）語と「剛毅、則不屈於物欲、木訥、則不至於外
馳、故近仁」という楊氏（時）語を引いた。この楊氏語について
「コレニテハ剛毅木訥ハ物欲ト外馳トヲ衛クノ工夫也、質ニアラ
ス」とは、東所『古義抄翼』の批判である。徂徠に対しては、竹
山が「渠恒言仁者安民之徳也、……質樸拙言之於安民、豈不亦
遠乎哉」（『非微』）と難じた。

二十九

子路問曰、何如ナレハニキ斯可謂之士ヲト矣、子曰、切切

微ニ博雅ヲ引テ、敬シツ、ム、兒トス（一）

偲偲

同書ニ、泰伯篇ノ蕙ト同シク、恐レ慎ム兒カトイハレタリ（二）

怡怡

和キ悦ウツクシム兒ナリ（三）

如也、

如ノ字ハ、上ノ三ツニ同ジクカ、レリ、容兒顔色辞氣ニ心バエ
ノアラハレタルニテ、所謂威儀ナリ、敬慎威儀、維民之則トイ
ヘリ、礼記ニ云、君子不レ失口於人、不レ失色於人、外ヨリ修メテ内ニ
及ボスハ、礼ノ体也

可謂士矣、朋友切切偲偲兄弟

兄弟親類一族マデヲ云

怡怡、

朋友ニハ敬ヲ主トシ、親類ニハ愛ヲ主トス、親疎貴賤ノ交リハ、
愛敬ノ二ツヲ色々ト調合シテ、夫々ニ宜シク相応セシムル事ナ
リ（六）

(1) 徂徠『論語徵』に、「博雅曰、切切、敬也」とある。

(2) 同じく徂徠『論語徵』に「偲偲蕙邪、則切切偲偲敬而怡怡和

也」とあるが、「泰伯篇ノ偲」への言及はない。「子曰、恭而無礼
則勞、慎而無礼則蕙」（泰伯篇第二章）の「蕙」について『論語
徵』は、「畏懼之貌」とする古注（何晏）を引いていた。ちなみ
に腋は「泰伯篇ノ偲」を「オソル」と訓んで、「オヅ／＼トノミ
シテ、物事ニオソレスクル也」と説明していた。

(3) 「ウツクシム」は、「大切にする。いとおしむ。かわいがる」
『日本国語大辞典』

(4) 「穆穆魯侯、敬明其德、敬慎威儀、維民之則」（『詩経』魯
頌・泮水）

(5) 「君子不レ失足於人、不レ失色於人、不レ失口於人、是故君子貌
足畏也、色足憚、言足信也」（『礼記』表記篇）

(6) 仁斎が「此三者、皆有忠愛之意、蓋士之行、雖不可以一尽、
然以忠愛為本、苟不足於茲、則其行不能遠達、故夫子以此三
者答子路之問、可謂親切矣」（『論語古義』）と述べたが、腋はこ
れを意識して、より弁別的に「朋友ニハ敬」「親類ニハ愛」とし
たのではないだろうか。徂徠や春台には、こういう関心は見えな
い。朱子『論語集註』は、「切切、懇到也、偲偲、詳勉也、怡怡、
和悦也、皆子路所不足、故告之」とする胡氏（寅）語を引いて、
子路の欠点に即した答えだとする。徂徠もまた、「由也嘒（先進
篇第十八章）、未免失其容焉、故特以此言之」（『論語徵』）として、
子路のがさつきに与えられた注意だとする。さらに徂徠は、「聖
人之教尚仁、仁者相生相長相養相育之道也、学而成德、然後可以

臨民、故仁必以修身為本、威儀德之符也、故君子慎其容、祇士未可以臨民也、故以朋友兄弟言之」と述べて、「士」は仕官以前の者を指していると説いた。

三十、

子曰、善人

前章ニモ見エタル善人也⁽¹⁾

教民⁽²⁾

民ニ義勇ヲ教へ、礼儀ヲ教へ戦陳ノ法ヲ教ルヲ云ナリ

七年、

タトヒ湯武周公ノ如ク、足ラヒ備レル仕方ニ及バズトモ

亦可以即⁽³⁾ 戎矣⁽⁴⁾

戦陳ノワサニ用フベシト也⁽²⁾ ○左伝ニ晋ノ文公、民ヲ息フル事五年ニシテコレヲ用フ、一戦シテ覇タルハ、文ノ教也トイヘリ、又戦ントスル時ニ、有莘ノ墟ニ登テ、軍ヲ望テ云ク、少長礼アリ、ソレ用フベシトイハレシ事アリ ○朱子云、民其上ヲ親ミ、其長ニ死スル事ヲ知ル故ニ、戎ニ即シムベキナリ⁽⁴⁾

(1) 胤は「善人」を、「聖人君子ト云外ニ、器量スクレタル人ノ事也」（先進篇第十九章）とした。「善人」の語は、述而篇第二十章・本篇第十一章・堯曰篇第一章にも見える。

(2) 「教民」について、朱子は「教民者、教之以孝弟忠信之行、務農講武之法、……民知親其上、死其長、故可以即戎」（『論語集註』）とした。仁斎は、「務農講武之法」を外して、「教民、謂以善教之也、所謂修其孝弟忠信是也、……民亦有所感化、自能為長上死」（『論語古義』）と述べて、道徳的な感化の面を強調した。徂徠『論語徵』はこの章について論じないが、春台は、「教民者、教之戰也、此荻先生之說、蓋因下文及下章之言以知之、其義是也」（『論語古訓外伝』）として、さらに「雖有孝弟忠信之人、而不習卒伍行陳之法、坐作進退之節、何以能戰哉」と補った。胤は、春台を受けている。大峯は、「茂卿之說、以德夫之言、則亦誤教字、武用教字、未之見也」（『論語群疑考』）と指摘している。

(3) 「晋侯始入、而教其民二年、欲用之、子犯曰、民未知義、未安其居、……子犯曰、民未知信、未宣其用、……子犯曰、民未知礼、未生其恭、……民聽不惑、而後用之、出穀戊、積宋圍、一戦而覇、文之教也」（『春秋左氏伝』僖公二十七年）「晋車七百乘、韃鞞鞅鞞、晋公登有莘之墟、以觀師曰、少長有礼、其可用也、遂伐其木以益其兵」（同二十八年）

(4) 朱子の解釈は注(2)で紹介したが、これについて楊斎が、「教民、本非為即戎、而設教之深、亦可以知即戎矣」（『論語集註鈔説』）として、軍事はあくまで付随的な事項であると説いている。

(5) 息軒が、「自文武分科、儒者忌言兵、不知古之賢大夫、入相出將、未有不材兼文武者、……孔子言軍旅之事未之学（衛靈公篇第一章）者、特有為而言焉耳」（『論語集説』）と論じている。

三十一

子曰、以不教民戰、

必敗北ニ至リ、死亡ノ者多カルベシ⁽¹⁾

是謂棄之

シカレバ民ヲ戰ハシムトハイフベカラズ、アタラワガ民ヲ、ワガデニ棄トイフモノナリト也

(1) 古注（馬融）の「言用不習之民、使之攻戰、必被敗、是謂棄之」と、朱子の「言用不教之民以戰、必有敗亡之禍、是棄其民也」（『論語集註』）を受ける。仁斎は、ここでは「教、教民以戰陣之法也」と明言し、「古者教民之法、三時務農、一事講武、耳目習于旌旗、手足練于干戈、自無敗亡之禍、若不然、則与措于死地無異矣、此蓋承上章而言亦不可以不講武也、君子重民命如此」（『論語古義』）と続けた。

(2) 「我が手に」か。

憲問第十四

一 憲

上論ニ見エタル原思也、下論ハ此人ノ作ナル故ニミヅカラノ事ヲ名ヲ称セリトイヘリ⁽¹⁾

問恥

恥ベキ事ヲ問ナリ

子曰、邦有道穀、

美濃ノ人早野右膳云ク、穀ノ上ニ不ノ字脱タルベシ、トイヘル

善シ⁽³⁾、穀スルハ禄ニ有付ライフ

邦無道穀 恥也

上論泰伯篇ニ云、邦有道、貧且賤焉、恥也、此ノ上ノ句ト似タリ、邦無道、富且貴焉、恥也、此ノ下ノ句ト似タリ、彼ハ事大キナル故ニ二ツニ分チ、此ハ穀禄ニテ事小キ故ニ、一ツニシテイハレタリ、彼ハ道ヲ枉ルカ、徳ノナキカノ論也、此ハマコトノ材能アルカナキカノ論也、原憲カ身分ニ相応シタル答ヘト見ヘタリ⁽⁵⁾

(1) 朱子は、「胡（寅）氏曰、此篇疑原憲所記」（『論語集註』）とし、仁斎『論語古義』もそれに倣ったが、徂徠は、「蓋上論成於琴張、而下論成於原思、故二子独称名、其不成於他人之手者、審矣」（『論語微』）とし、春台も、「此章原憲自記其所聞、故不言姓

而称名也、蓋論語後十篇、皆原思所記」(『論語古訓』)とした。春台は、徂徠の見解も春台の着想をヒントにして得られたものであると伝えている(『論語前後説』、『紫芝園後稿』卷九)。

(2) 未詳

(3) 一斎にも、「夫子嘗曰、邦有道、貧且賤焉、恥也、邦無道、富且貴焉、恥也、此以邦有道穀為恥、則矛盾、穀字上疑脱一字耳」(『論語欄外書』)という指摘がある。

(4) 「子曰、篤信好學、守死善道、……邦有道、貧且賤焉、恥也、邦無道、富且貴焉、恥也」(泰伯篇第十四章)

(5) 古注(孔安国)は、「邦有道、当食禄」「君無道而在其朝、食其禄、是恥也」とした。これに対して朱子は、「邦有道、不能有為、邦無道、不能独善、而但知食禄、皆可恥也」、邦に道があつても何をなすこともなく禄を受け、邦に道がなくても平気で禄を食む、そういう態度が恥だと解釈した。江戸期の朱子学では、「邦有道穀、邦無道穀」(闇斎点)「邦有道穀、邦無道穀」(後藤点)というように訓読している。さらに朱子は、原憲の処世に絡めて、「憲之狷介、其於邦無道穀之可恥、固知之矣、至於邦有道穀之可恥、則未必知也、故夫子因其問而並言之、以広其志、使知所以自勉而進於有為也」(『論語集註』)と論じた。仁斎は朱子に従い、東涯は、「憲問恥、非問食禄之道也、若如古註、則只是言仕進之方、非言恥也、問答不相对值」(『論語古義標準』)と古注を批判している。徂徠は、古注を支持して「古人善

解古文辞者、如是矣」とし、「且曰憲之狷介、是果何所據、宋儒恣以己意品目古人、僭哉」(『論語徵』)と述べて朱子の議論を斥けた。徂徠に対する懷徳堂からの反論を紹介しておく。「如孔安国解、童稚所能知、豈宜以告原憲乎、彼謂善解古人辞、慙矣哉」とは蘭洲『非物篇』の、「原憲為孔氏宰、而辞其粟、有所不為之狷、可知矣、亡在草沢中、見子貢、称貧而非病、有所守之介、可知矣、朱子所據、近在乎論語史記、而渠不知、寡陋之甚」とは竹山『非微』からの批判である。

二.

克

人ニ勝チ、人ヲ凌キ辱カシムル事ヲ好ム也

伐

武功ニ慢ズルナリ

怨

世ヲ憤リ、或ハ人ヲ怨ルナリ

欲

色慾ナリ

不行焉、

タトヒ其心ハ得ハナレズトモ、行事ノ上ニ少シモアラハサズ、ツ、シミオホスル也⁽¹⁾

可以為仁矣、

何人カ、ヤウニイヘル事ノアリシヲ、次ノ如ク孔子ノ判断アリ

シナリ

子曰、可以為難矣、

仁ノ字ヲ難ノ字ニカフベシトナリ、コノ四ツヲヨクツ、シム事ハ、シニクキモノニハアル也

仁則吾不知也

サリトテソレヲ仁ト云事ハイカミアラン、吾シラズト也、仁者

ニハ本ヨリ此四ノ行ヒナカルベシ、此四ノ行ナシトテ、仁トハ
イヒガタキナルベシ⁽³⁾

(1) 古注(馬融)は「克、好勝人、伐、自伐其功、怨、忌小怨、欲、貪欲也」、朱子はそれを受けて、「克、好勝、伐、自矜、怨、忿恨、欲、貪欲」(『論語集註』)とした。仁齋『論語古義』や春台『論語古訓』は古注に拠るが、徂徠『論語微』には言及がない。臈が、「伐」を「武功」に、「欲」を「色欲」と特定する点は興味を引くが、「色欲」について「タトヒ其心ハ得ハナレズトモ」云々は、春台の「聖人ノ道ニハ、他ノ婦女ヲ見テ心ニ美女ナリト思ヒ、其色ヲ悦テモ、身ニ非礼ヲ行ハザレバ、礼ヲ守ル君子トス」(『聖學問答』)を想起させる。

(2) 古注は前章と合わせて一章とし、朱子は「此亦原憲以其所能而問也」(『論語集註』)とした。仁齋は、「此亦原憲以其所希望而

問也」(『論語古義』)として、やや意地の悪い朱子の解釈を修正している。これに対して徂徠は、「克伐怨欲」の句の前に「脱文」があるのだろうとして、「蓋時人拳當時賢大夫如管仲者称之、非門人問之、故曰矣而不曰乎」(『論語微』)と述べた。徂徠は、「克伐怨欲不行、謂不行於其国中也」として、個人の道徳的行為ではなく、国政の内容が問題とされているのだと言う。春台も、「矣者、決辞、非問辞也」(『論語古訓外伝』)として、徂徠の解釈を支持した。

(3) 朱子は、「有是四者而能制之使不得行、可謂難矣、仁則天理渾然自無四者之累、不行不足以言之也」とし、程氏(伊川)語「或曰、四者不行、固不得為仁矣、然亦豈非所謂克己之事、求仁之方乎、曰、克去己私以復乎礼、則私欲不留、而天理之本然者得矣、若但制而不行、則是未有拔去病根之意、而容其潛藏隱伏於胸中也、豈克己求仁之謂哉」を引いた(『論語集註』)。「克伐怨欲」を押さえようという努力は尊いが、少しでもその「病根」が「胸中」に残っている限り、それは「仁」とは言えないのである。仁齋は、こういう朱子の考え方に反対して、「蓋慈愛之徳、能及物無一毫残忍之心、而後可以謂之仁矣、豈止無克伐怨欲之謂哉」という持論を述べて、さらに次のように論じた。「知徳者、務用力於仁、而不強事防閑、知徳之可尊而欲之不足惡也、不知徳者、徒惡欲之累其心而專用力於克治、殊不知苟修其徳、則其欲自退聴、徒惡欲之累己而強欲無之、則併其良知良能、斲喪遏絶、

不復得存、是不可不知也」「若後世無欲主靜之說者、実虚無寂滅之学、而非孔門為仁之旨矣」（『論語古義』）。問題を政治の次元で捉える徂徠は、「然則克伐怨欲不行於國中、何以不得為仁、曰、未知其人_レ有安民之徳、故曰仁則吾不知也」（『論語徴』）とした。春台・大峰・南冥らが、大筋で徂徠に従う。大峰は、「此或時人之語、或弟子之言、未可知焉、而必有其所指焉」（『家註論語』）とし、南冥『論語語由』は、質問者の念頭には鄭の子産があつたのではないかと推測している。